

〔新刊紹介〕

末次智著

『琉球宮廷歌謡論 首里城の時空から』

鈴木 耕太郎

柳田、折口が日本（大和）の「古層」を見出し以降、民俗学、国文学／日本文学研究において——いわゆる「発生論」、あるいは吉本隆明らによる「南島論」研究の対象として——沖縄／琉球は位置づけられてきた。筆者もまた、先学たちによる琉球のフィールド調査を基盤とした研究に影響を受けた一人である。他方、筆者は「大和人（ヤマトウンチュ）」でありながら「琉球（ウチナー）」で大学四年間を過ごした経験から、先学の研究に違和も感じていたともいう（前書『琉球の王権と神話』。そのため筆者は、フィールド調査ではなく、専ら『おもしろさうし』というテクストから、琉球という場を見つめ、さらには大和を照らし出そうと試みた。

わち（場）をどう捉えたかに着目したい。タイトルにもある「宮廷」という（場）は、単に「首里城」を指すのではなく、「オモロ」がうたわれた祭祀空間、聖化された空間を指す。そこでうたわれた「オモロ」は琉球の王統における神の時代のうたでもあった（第Ⅱ部「宮廷」という時空」、第Ⅲ部「宮廷歌謡としてのオモロ」、第Ⅴ部「宮廷の教養」）。そのため「オモロ」は、琉球王府の「神話」であるともいえよう。ただし、「オモロ」も（場）の変化により変遷していく。神話の継承、あるいは形骸化からの再創造は、（場）の問題と直結していると考えることができる。

また、シャーマンが語り、聞き手がその語られる時空を共有するとき、筆者は文学が「発生」しているという（第Ⅰ部「歌謡表現の基層」）。すなわち、語られる（場）を問うということは、文学の発生をも問うということになる。当然、シャーマンの語りは神を前提とした神話に他ならず、神話と文学との結びつきが明らかにもなるが、今度はシャーマンという宗教実践者にも注視する必要が出てくる。これは「オモロ」を誰がうたったかという問題とも直結する（第Ⅱ部、第Ⅲ部）。

もちろん、序章、第Ⅰ—Ⅴ部、終章まで、計二二編の論考、四五七頁にわたる本書の成果は、右の論点に留まるものではない。

「大和」が「琉球」を抑圧し、収奪してきた（している）歴史を受け止め、「大和人」が琉球文学を学ぶべきなのか、という問いを内面化した筆者でなければ記せなかった琉球文学の本質、また琉球文学を通して見えてくる「大和」の在り方が明らかになっている。

（森話社、二〇一二年一〇月、四五七頁、八二〇〇円＋税）

（すずき・こうたろう 本学博士後期課程）